日本人の「精神性」

尊田 望

英語の spirituality という言葉は、英語では比較的頻繁かつ自然に用いられているが、日本語にあたる「精神性」、または「霊性」という表現は、あまり用いられないし、用いても意味がよく伝わらないことが多い。そこで、まず英語の spirit 及び spirituality の意味を明確にし、それに相当する日本語の用語（精神、魂、霊、心、精神性、霊性）を確認した。次に、これらの漢字の語源を調べ、元来の概念を確認した。さらに、「精神」に関して哲学的・宗教的な定義を調べ、また、最新の科学による精神論とも比較した。最後に、バハイ教の精神論と比較対照した。精神論は、現代の科学的な知識により、従来の精神性のイメージとは変わりつつある。日本の伝統的精神論は、バハイの「精神」の概念と一致する点も多いが、決定的な違いは、前者には、創造主としての唯一神の概念が薄く、また、神がその意志を累進的に啓示するという累進的啓示の概念がないことである。Spirituality の適切な日本語表現としては、決定的なものはないが、「精神性」や「霊性」でさしつかえないと思われる。むしろ、概念が正しく理解されていれば、それを現す表現も自然と受け入れられよう。

緒言

宗教的分野にかかわらず、人間の内面的活動について語るとき、英語では、spirituality、あるいは spiritual という単語が比較的頻繁かつ自然に用いられている。たとえば次のような例があげられる：“Woman-based spirituality gains followers,”[1] “Tapping Spirituality in a Violent Society,”[2] “Tracing the Synapses of Our Spirituality: Researchers Examine Relationship Between Brain and Religion,”[3] “An Anthropologist Looks at One Aspect of New Age”[4].

しかし、日本語にあたる「精神性」、「精神的」、または「霊性」、「霊的」という表現は、あまり用いられないし、用いても意味がよく伝わらないことが多い [5]。Spiritual という英語の表現は、学術的な場だけでなく、日常会話やテレビ、映画などの場でも比較的よく用いられている。もちろん、その宗教的あるいは哲学思想的な性質ゆえに、誰もが気軽に使っているわけではないし、それに抵抗を感じない人がいないわけではない。しかし、日本語の「精神的」、「霊的」という表現に比べたら、かなり自由に使われている印象を受ける。それで、英語と日本語の間で会話が交わされる時に、この概念を伝えるのが困難なことがしばしば起きる。

もうひとつの問題点は、日本語の「精神的」という表現には、英語の spiritual とは異なる意味があることで、むしろ、その意味で使われることが多いという事実である。たとえば、「精神的に疲れた」という場合、これは心理的に疲れたという意味で、英語で言えば、“I am mentally tired” “I am

---

[1] Denver Post, The (CO), September 14, 1993
[2] San Francisco Chronicle (CA), June 22, 1998
[3] Washington Post, The (DC), June 17, 2001
[4] Chicago Tribune (IL), May 11, 1997
[5] このトピックを取り上げるに至ったきっかけは、2000 年 1 月に開かれた第 8 回 ABS 日本支部大会の「世界市民権ワークショップ」で、ある参加者が次のような発言をしたからである[38]。ある日本の大臣が欧米を訪れているときに、子供や若者の教育の話になり、そのとき、欧米の指導者達はしきりに”spirituality”の必要性を提唱していたという。英語で”spirituality”と言われ、日本語での意味は何となるか考えてみたところ、「霊性」が選ばれたというのである。しかし、「霊性」という言葉の響きが、同ワークショップの日本人参加者には、何となく「霊能力」に関する宣伝や書籍などに見られるように誤解があるようで、しっくりこなかった。そこで、spirituality の概念自体、日本ではどう取られているかまず研究し、そしてその結果として適切な訳語があれば提案してみよう、という話になったわけである。

emotionally exhausted" と言ったりする。あるいは、「精神病」と言えば英語では mental illness で、心理的あるいは精神医学的な病気を指す。同じく、「精神年齢」(mental age)、「精神障害」(mental disorder)、「精神療法」(psychotherapy)などはすべて、心理学的(psychological)・精神医学的(psychiatric)な用語で、spiritual と言う用語は出てこない。

「精神」の意味については、辞書[6]によると、次のようになる:

1. (物質・肉体に対して)こころ、たましい
2. 知性的・理性的な、能動的・目的意識的な心の働き。根気、気力。「向学の精神」
3. 物事の根本的な意義、理念。「建学の精神」
4. 個人を超えた集団的な一般的傾向。時代精神・民族精神など。
5. 多くの観念論的形而上学では、世界の根本原理とされているもの。たとえばヘーゲルの絶対精神の類。

宗教的な意味合いでの「精神」とは(1)だけで、あとは他の分野で使われる意味である。さらに、「霊」については、こう定義されている[7]:

1. 肉体に宿り、または肉体を離れて存在すると考えられる精神的実体。たましい。たま。「霊魂」、「霊肉」、「幽霊」、「霊前」。
2. はかり知ることのできない力のあること。目に見えない不思議な力のあること。また、その本体。「山霊」、「霊妙」、「霊験」、「霊薬」。
3. 尊いこと。恩恵。「霊宝」、「霊雨」。

このように、「霊」に関しては、宗教的な意味合いに加えて、「超自然現象」、「超能力」的な意味まで含まれているので、「霊性」、「霊的」という表現はなおさら、聞く者に様々な想像をめぐらせてもおかしくない。

研究の目的

この研究の目的は以下のとおりである。

1. 英語の spiritual、spirituality の意味を明確にする。
2. 英語の spiritual、spirituality に相当する日本語の表現を「精神」以外にあれば選出し、その意味を調べる。
3. 日本語の「精神」及びその類語の語源を漢字の起源を通して調べる。
4. 「精神」に関する概念を、哲学的に調べる。
5. 科学的な視点から、「精神」の意味を調べる。
6. バハイの「精神」に関する概念を調べ、(1)～(6)までに調査した「精神」の概念と比較対照してみる。
7. 英語の spirituality の日本語訳として適切な表現が何であるか提案する。

Spirituality の語源と意味

Spirituality の語源と関連派生語

まず、英語の spiritual、spirituality の語源についてみてみると、ラテン語の *spiritus* (= breathing、呼吸、風、微風、空気、息吹、生命、霊感、精神、魂、性格、勇気、熱意、誇り、傲慢)に由来しており、その派生語として、spirio, spirare, spiravi, spiratus[8] などと変化していく。英語の

[6] 「広辞苑」、新村出編、岩波書店、1991
[7] 同上
[8] to breathe: 息をする、風が吹く、息を吸う、匂いがする、目標にする

spirit の派生語は spirit－spiritual－spirituality－spiritualize－spiritualization などである。英語以外で、spirit の同意語あるいは類語として上げられるのは、soul(魂), mind(知性), psyche(魂)などである。英語の欧州語では次のような単語が上げられる：ギリシャ語＝nus(精神), pneuma(精神、霊魂), psyche(魂)、ラテン語＝spiritus, animus(心), ingenium（性質）、ドイツ語＝Geist, Seele, Wille(意志)、フランス語＝esprit, cœur（心）; âme(魂), vie(生気), mânes(死者の霊), divinité(神性)。

"Spirit"の意味

ある辞書[9]によると、spirit の意味は次のとおりである。

1. (肉体を働かせたり肉体と魂とを媒介する)人間の生命力の根源；生気、生命の)息吹: give up one's spirit。
2. 人間の霊的部分、(肉体に対して)心、精神: present in spirit though absent in body.
3. (死んだとき肉体から分離すると見なされる)魂、霊魂(soul): He has scarcely ever believed in spirits.
4. (物質に対して)精神、心: the world of spirit; the poor in spirit
5. (特に、場所・物などに住みついたり特定の性格を備えたりした)超自然的で実体のない存在、精、精霊、幽霊、亡霊: evil spirits, good spirits
6. 妖精（fairy, sprite）；小妖精(elf)
7. 天使(angel)；悪魔（demon）
8. (人の思考・感情・行動を促し、それらを方向付ける)精神的姿勢、心的態度、心構え；. . . 精神、. . . 魂［e.g.,改革の精神= the spirit of reform、開拓者魂=the pioneering spirit］
9. 《Spirit》神霊、神の霊（Holy Spirit）：人間の心に働きかける神.the Spirit of God, the Spirit of Truth, "God is a Spirit."
10. 霊、息：神聖な、人を鼓舞し、生き生きさせる存在・力。The spirit of God
11. 《Spirit》聖霊(Holy Spirit); 《the Spirit》神(God)：三位一体(the Trinity)の第三のペルソナ。
12. 《感情・情緒の所在する場としての、または行動の原動力としての》魂(soul)、心(heart)。A man of broken spirit; do as the spirit moves one.
13. 《spirits》(喜怒哀楽に関する)感情（feelings）、気分、きげん(mood): low spirits; good spirits; in high spirits
14. (活力・勇気・意志の堅さなどの点から見た)優れた性質(態度)；気概、気迫、熱情(mettle)。That's the spirit!
15. 気質(temper)、気風、気性、性向(disposition): meek in spirit; in a lively spirit.
16. 《形容詞を冠して》(一定の態度・気質・性格・行動などからみた)個人［A few brave spirits remained to face the danger］
17. 支配的傾向《性質》(dominant tendency or character of anything): the spirit of the age; the spirit of the picture
18. (あるグループ内での)旺盛な身内（帰属）意識、(団体に対する)忠誠心(vigorous sense of membership)
19. 《通例 the を冠して》(陳述・文書などの)意味、意図、趣旨(general meaning or intent) (letter) the spirit of the law
20. 【化学】(特に蒸留によって液体の形で抽出された物質)のエキス、エッセンス、実効成分(active principle)
21. 《しばしば複数形で》蒸留アルコール：アルコールの強い蒸留酒。
22. 《主に英》アルコール。(alcohol)
23. 【薬学】酒精剤：精油など揮発性医薬品のエタノール溶液。(essence)

[9]「ランダムハウス英和大辞典」、"spirit"、小学館、1987

24. 生命の液:肉体にしみわたっていると以前考えられたある種の微妙な液体。

この中で最も近い意味と思われるのは、(1)、(2)、(3)、(4)、(9)、(10)あたりで、spirit の主な定義の部分である。

Spirituality の日本語訳としては次のとおりである[10]:

1. 精神的であること、精神性
2. 霊的(非物質的)性質、霊性
3. きわめて精神的な特徴、精神的傾向(気風)
4. 教会の財産(収入)、聖職者の職能上の財産(収入)

(1)と(2)が適切な意味であるが、【精神】、「霊」という単語の意味をさらに解明する必要がある。そこで、これらの漢字の起源に戻ってみる。

漢字の起源に見る「精神」の意味[11]

精＝米＋青

『米』＝こめ、穀類、メートル、アメリカ。『青』(音符)＝澄みきっている。――＞きれいについた米、澄んだ心。(1)詳しい、(2)心、魂;(3)誠、真心;(4)神、もののけ、あやしく不思議なもの。(5)しらげよね。ついて白くした米。(6)まじりけがない、純粋。(7)もっぱら。(8)優れている。(9)清い。(10)奥深い。(11)光、日月星。(12)本＝生命の根源、万物を生成する陰陽の気。(13)ひとみ。

図 1.「精」の起源

神＝ネ(示す)＋申

『ネ』＝象形文字。神にいけにえをささげる台の象形。祖先神という意味を表し、また指に通じて、示すの意味をも表す。人にあらわして見せる。教える、人に告げ知らせる、指図する。示し、教え。指図。くにつかみ(国土を守護する神)、地の神(＜――＞天神)。

『申』＝(音符)いなびかり(稲光)の象形で、天の神の意味。

『ネ』＋『申』＝地の神＋天の神

『神』＝天の神、宇宙万物の主宰者、魂、霊魂、こころ、精神、霊妙で測りきれない働き、理性では測れない不思議な働き、極めて尊くて、侵すことのできないこと。

魂＝云＋鬼

『鬼』＝(1)死人の魂、神として祭られた霊魂、不思議な力があると信ぜられるもの、ひとに害を与えるもの、もののけ、ばけもの、地獄にいて亡者を扱う者(仏教)、(2)遠い、(3)星座の名、二十八宿の一つ、(4)おに:想像上の生物で、人の形をして角があり、裸で虎の褌(ふんどし)をしている。勇猛なものの形容(鬼将軍)、残忍な者の形容、大きくいかめしいものの形容。(グロテスクな頭部を持つ人の象形、死者の魂の意味)

『魂』＝鬼は死者の魂の意味、音符の『云』はめぐるの意味。休まずにめぐるたましいの意味。:

---

[10] 小学館ランダムハウス和英辞典、小学館、1987

[11] 「漢語林」、鎌田正、米山寅太郎、大修館、1990。

たましい。肉体を司るもの。こころ、思い、からだ、かたち。すきま、月・月光、明らか。かす。
ある辞書には「魂」の意味として、こう書いてある[12]:

1. 動物の肉体に宿って心の働きを司ると考えられるもの。古来多く肉体を離れても存在するとした。霊魂、精霊、たま。「魂が抜けたような姿」
2. 精神、気力、思慮分別、才略。「魂を込める」
3. 素質、天分。「三つ子の魂百まで」
4. 精進髷(葬列に加わるときの女性の髪型)人の精神を司るもの、肉体を司る『魄』に対して。生きていればこの二つが宿っているが、死ねば離れるという。霊魂(―>肉体)。こころ、思い。

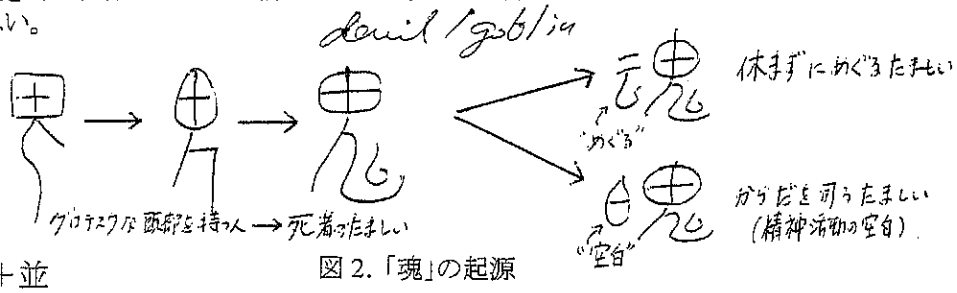

図 2.「魂」の起源

霊=雨+並

雨=象形文字、天の雲から水滴が滴り落ちる形にかたどり、あめの意を表す。『霊』は形声文字で、もとは『玉』+『 』。後者は、祈りの言葉を並べて雨ごいするの意味。別体の( )は、玉の部分が巫女で、みこの意味。玉を供えたりして雨ごいをする「みこ」のさまから、神の心・たましい・みこ等の意味を表す。常用漢字は　の省略体。たましい、死者の魂、心、精神、まこと、まごころ、いのち、命数、神、神秘な力、不思議な力、善い、すぐれている、さいわい、幸福、いつくしみ、慈愛、明らか、巫女。その他、「霊(りょう)」[13] と読む場合には、「たましい、特に、たたりをするものという意味があり、「死霊」、「怨霊」などがその例である。

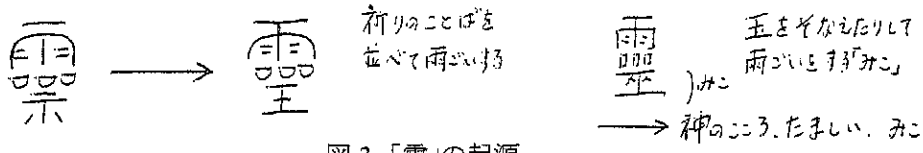

図 3.「霊」の起源

心

心臓の象形文字。精神、知情意の本体、考え, 気持ち。心臓、胸。真中、中心に入っているもの、物事の重要な部分。星座の名、なかご、さそり座の中にある(二十八宿の一つ)。

まとめ

「精」とはもともと「澄み切った」という意味であることがわかる。「神」は「地の神」と「天の神」の組み合わせであり、したがって、「精神」とは、「澄み切ったもの」と「神」の組み合わせである。「霊」は「神のこころ」であり、「たましい」を意味する。「魂」は休まずにめぐる精神的生命つまり、「たましい」である。いずれにせよ、漢字の起源を見る限り、それぞれ現在使われている意味よりもさらに深く、また幅広い意味が含まれていることがわかる。

---

12 同上
13 同上

「精神」の哲学的な定義[14,15,16,17,18]

次に精神の哲学的な定義を見てみる。原始社会では、身体の中に空気や火のようなものが宿っていて身体を支配すると考えた。それは、生存中も身体を離れることがあり、死に際して最後の気息とともに吐き出されて当人の影、亡霊として存在し続ける。つまり、アニミズムであり、人間以上あるいは以下の善悪様々の霊をつけ加え、人間の禍福や自然現象をこれらの霊のせいにした。

欧州では、前述のとおり、ギリシャ語が語源となり、気息、風、空気などを意味した。

バラモン教やユダヤ教などでは、非物質的なものとしての精神、あるいは神を指して精神という表現を用いた。

---

[14] 「哲学事典」、平凡社、1989。

[15] 日本人の精神史の変遷:「ち」(霊)は「カミ」の古代的用途で、(複合語として用いる)自然物の威力・霊力を表す語。「いかずち(雷)」、「おろち(蛇)」など。「たま」(魂・霊)は特定の人物または物体で、あいまいな個性がある。魂。「かみ」(神)(守、上、髪、紙、長官、加味、佳味など)人間、非人間、生物、非生物にかかわらず、畏敬の念を起こすもの。古代民俗信仰はアニミズム的であった。古事記、日本書紀に見られる神話に登場する日本の神々も「かみ」と呼ばれた。仏教が伝来したときには、名称のなかった民俗信仰は「カミの道」(=神道)と名づけられた。仏教は「ホトケの道」(=仏道)と名づけられた。その後、神道と仏教は、融合・分裂・対立を繰り返した。また、中国からは儒教と道教が伝来し、日本文化に同化していった。16 世紀にはキリスト教が伝来し、明治維新時には伝統的日本文化と西洋文化が融合した。第2次世界大戦時には神道が国教化され、他宗教は弾圧された。戦後、科学発達と物質的豊さとはあいまって、精神的飢えが社会を特徴づけた。これは、一方では宗教ブームを引き起こし、他方では宗教的スキャンダルによる宗教への懐疑論が生じるという、精神的な混乱につながっている。

[16] 神の定義(「広辞苑」、1991)

1. 人間を超越した威力を持つ、隠れた存在。人知を以ってはかることのできない能力を持ち、人類に禍福を降すと考えられる威霊。人間が畏怖し、また信仰の対象とするもの。(天地の神を祈りつつ吾待たむ早来ませ君待たば苦しも。
2. 日本の神話に登場する人格神。「天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は」
3. 最高の支配者。天皇。「大君は神にし座せば天雲の雷の上においらせるかも」
4. 神社などに奉されている霊。
5. 人間に危害を及ぼし、怖れられているもの。(1)雷、なるかみ、(2)虎・狼・蛇など。
6. キリスト教で、宇宙を創造して支配する、全知全能の絶対者。上帝。天帝。

[17] 神の哲学的観念(尊田望、2章)

1. 人格神論(有神論):theism 神は個性的な存在で、人間との意志疎通ができる。
2. 多神教: polytheism 個性的な神が複数存在し、生活の様々な分野や機能を司る。
3. 単一神教: henotheism 複数の神がいるうち、一つだけに忠誠を誓う。
4. 汎神論: pantheism 神は自然・世界・宇宙と同一視される(神=万物)。
5. 万有在神論: panentheism 万物が究極的に神において存在する(世界や宇宙は神の存在の一部であり、神の内部に存在する)。
6. 不可知論: agnosticism 神は存在するが人間には直接理解できない。
7. 唯神論: monotheism 神は唯一にして最高であり、個性的にして道徳的で、人間から絶対的な忠誠を求める。
8. 無神論: atheism 神は存在しないとする立場。
9. 懐疑論: skepticism 単に神の存在を疑うという態度。
10. 自然主義論: naturalism 精神的な局面を含めた人間生活の全ての局面は自然現象を通して全て説明できるとする(超自然的・精神的要素は否定され、自然的要素や力で説明しようとする)。

[18] 神の存在証明論(尊田望、2章)

1. 本体論(存在論): Ontological proof 創造主にして完璧、全知全能であるという定義からすでに存在が証明済である。
2. 目的論: teleological proof 冷蔵庫からコンピュータに至るまで目的がある。したがって、人生・世界・宇宙にも目的があるはずである。その目的を持ち、伝えるのが神である。
3. 宇宙論: cosmological proof: 自然・世界・宇宙は優れた仕組みにより成り立っている。それを設計した「知性」が神である。
4. 道徳論: moral proof この世に存在する試練・困難を克服していくために知識・理解・力を授けてくれるのが神である。

なお、神の存在反論としては、心理学的反論(cf.フロイト)や社会学的反論などがある。

ギリシャ哲学では、アナクサゴラスが、世界原質たる無数のスペルマタの混合の原動力として精神 nus をたてた。プラトンは、イデアと合一できる人間精神 psyche が非物質的、永遠不死の存在としたが、一般的ギリシャ的存在論では人間の精神はまだ動物的・植物的霊魂と連続的であると考えた。

中世神学では、デカルトが精神と物体とを無限の実体である神に依存する二つの有限な実体として対立させ、前者の属性を思惟、後者の属性を延長として両実体間の依存関係を否定する二元論を立てた。スピノザは、それを神(=自然)一元論に改造し、ライプニッツは、単子論(精神が実体ないし実体の属性と考える)を唱えた。

近代哲学の時代になると、ロックが、精神的実体は一個の複合観念につけられた名前にすぎないと考えた。バークリーは、精神的実体=「観念」に対立する能動的、主体的な「力」であるとし、ヒュームは、実体としての精神を完全に消去した。

代わって、中国思想では、万物をして万物たらしめる「道」を根源として人間の内に生動するものとしている(c.f.,「荘子」)。中国思想では、これと非常に深い関連のあるものとして、「気」の概念がある。これは、もともと人の呼吸を意味していた。そこから、生命力や活動の根源と言う意味が出てきた。道家では、「養気」というとき、長寿を保つ意味があり、孟子は宇宙に縦貫するほど広大な「浩然の気」というものを考えた。しかし結局は自然物に含まれる霊的なものも「気」の中に含まれる。「陰陽」とか「五行」という概念はここから出てきた。

科学に見る「物質」と「精神」

19 世紀以降の科学的発展は目覚しく、それに伴い、人間の物質と精神に対する見方も変わってきた。たとえば、究極の物質「アトム」を求めて、原子論も変わってきた。遠い昔は、宇宙は「風土水火」という「四元素」から成っていると信じられていた。近代科学では元素論が発達した。そして、原子核とその周りをまわる電子・陽子・中性子の発見により、物質の究極のモデルが完成したと思われた。しかし、原子核の分裂が可能になり、物質の最小粒子の探求はまだ続いている。クオーク理論などに代表される。

ニューサイエンス [19]

デイビッド・ボームの「宇宙モデル」:彼は、宇宙を明在系(目に見える宇宙)と暗在系(目に見えない宇宙)に分け、このモデルを使って、「精神もエネルギーであり、「物質も精神もエネルギーとして『暗在系』にたたみ込まれている」と説明した [20]。

ジェフリー・チューの「ブーツストラップ理論」:この理論は、「世の中には究極の素粒子は存在せず、宇宙は、ブーツストラップ、つまり靴の紐のように互いに依存している」と説明している。自然は明確な基本特性を持った部品の集合体ではなく、あらゆる部分形の部分に相互に依存する、一種のダイナミックな織物である、とチューは説いている。

「超ひも理論」:超ひも理論によると、素粒子の根源は、長さが 10^{-33}cm(プランク・スケール)という極微のひもである。方程式を解くと、宇宙は 10 次元ないし 26 次元である。マカロニの直径は 10^{-33}cm、長さは宇宙の直径、10^{28}cm＝150 億光年である。余分の次元はこのマカロニにたたみ込まれている。この理論によれば、余分の次元が「精神世界」として説明することが可能になってくる。プランク・スケール以下の世界は時間も空間も定義できない(時空間が歪んでいる)ので、時空を超えたコミュニケーションが可能になる。たとえば、タイムトラベルや未来の出来事の予知などである。

このように、最新の科学的理論によると、これまで「おとぎ話」として片付けられてきた精神界の存在についても、ある程度科学的に説明できるようになってきているのである。そして、宇宙の構造(マクロ世界)と究極の物質(ミクロ世界)を説明できるモデルを可能にする理論が「大統一理論」として開発中である。

---

[19] 天外伺朗、「ここまで来たあの世の科学」、祥伝社、1994

[20] 「全体性と内臓秩序」、青土社、「ここまで来たあの世の科学」に引用。

「大統一理論」:現在知られている宇宙の4つの力、すなわち「重力」(=万有引力)、「電磁気力」、「強い核力」(原子力をまとめている力、ミクロの距離でのみ作用)[21]、「弱い核力」(放射性原子核の分裂や崩壊を司る力、ミクロの世界でのみ作用)を統一できる理論である。しかし、その統一には第 5 の力が必要で、まだ発見されていない。ある人たちは、これは「気」の力であると言い、ある人たちは「プラーナ」であると言い、さらにある人たちは「愛」であると言う。いずれにせよ、宇宙を支配しているこれらの力は、目に見えない力であり、それは、ある意味では「精神的な力」であると言えよう。

心理学・精神医学

心理学や精神医学の分野でも、目に見えない世界の研究が進んでいる。フロイトは、「無意識」の世界に関する理論で心理学の世界に革命を起こした。その弟子であるユングは、晩年、ヨガや瞑想に強い関心を示し、瞑想が物質界と精神界のコミュニケーションの重要な役割を果たすと強調した。

バハイの精神論

神の世界は無数である

バハオラは、「神の世界は無数」であると述べており [22]、物質界の生活は、精神界の生活の準備であり、始まりであるとしている。神の世界はその見方により、いくつかの方法で分けられる。たとえば、アブドル・バハは、鉱物の精神・植物の精神・動物の精神・人間の精神・信仰の精神・聖霊と精神を 5 段階に分けている(図 4 参照)[23]。さらに、人間界・神の顕示者の世界・神の単一性の世界という分け方もしている(図 5 参照)[24]。バハオラは、滅ぶべき世界(物質界)・正義の世界(精神界)・預言者から神へ向かう世界・神が語る世界・神のみの世界という分け方もしている(図 6 参照)[25]。神の本質は不可知だが、顕示者を通して神の意志を知ることができる [26]。人生の目的は、神を知り、愛し、崇拝することであり [27]、また人間は、「常に前進する文明を推進するために創造された」[28]。

この世とあの世は一体である [29]

精神界は時間と空間から隔離されていて、物質界とは異なる条件にあるが、アブドル・バハは、この二つの世界は、真に分離されているのではなく、ひとつであり、精神界の仕事は物質界のそれと同じであると述べている。これは、前述した「超ひも論」などの説明と一致している。

魂は単体のようなもので、分割できない [30]

アブドル・バハは、魂とは単体のようなもので、分割できないと述べている。したがって、魂は不滅で、肉体の死後も生命を存続する。ただし、その生命は、神の教えに忠実なものがより躍動的であり、それが真の生命と見なされる。知性(mind)は、人間の肉体(body)と魂(または精神、soul)の

---

[21] 中間子理論を参照のこと。
[22] Baha'u'llah, "Suriy-i-Vafa," *Tablets of Baha'u'llah.* この書簡で、バハオラは、「恒星には惑星があり、あらゆる惑星には生命がある」と述べて、物理的な宇宙でも地球以外での人間以外の生命の存在を示唆している。
[23] アブドル・バハ、「質疑応答集」、36 章。
[24] アブドル・バハ、「質疑応答集」、38, 39 章
[25] Baha'u'llah, "Tablet of Kullu'i-'ta'am," in A. Taherzadeh, *The Revelation of Baha'u'llah*, Vol. 1, pp. 57-60.
[26] アブドル・バハ、「質疑応答集」、37 章
[27] バハオラ、「祈りの書」、p.71
[28] バハオラ、「落穂集、1」、#109
[29] Abdu'l-Baha, *Abdu'l-Baha in London*, p.96,
[30] アブドル・バハ、「パリ講和集」、29 章

仲介役を果たす存在として位置づけられている(図7参照)[31]。肉体に視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚という五感があるように、魂にも想像力・思考力・理解力・記憶力・共通力という5つの力のあることをアブドル・バハは説明している[32]。共通力は、五感と魂の力を仲介する。肉体の生存中、魂と肉体は相互作用するが、究極的に、魂は肉体から独立している(図8参照)[33]。地上での生活においては、魂と肉体は相互作用し、不滅である魂も、その力の表現力は、肉体の状態に左右されるのである。「死後」も魂は成長と発展を続ける[34]。

バハイの精神に関する概念は、最新の科学とも一致する点の多い、科学的で包括的なものである。また、漢字の起源に見られるように、永遠に巡りつづける魂(人間の精神・信仰の精神)と肉体の生命を支配する「たましい」(植物的・動物的精神)という区別も、バハイの教えに見られる。天の神と地の神という日本古来の概念は、汎神論的、また多神論的であり、バハイが説く唯一神的な見方はあまり強くない。ただし、バハイの教えによれば、神の属性は宇宙全体、創造界全体にゆきわたっており、それは、神の徴として、我々人間が神について知るためのきっかけを与えてくれてもいる。したがって、汎神論的・多神論的な見方は、バハイの神観念と完全に矛盾するわけではない。

日本の神観念とバハイ教のそれとの決定的な違いは、バハイでは、神の本質そのものは不可知とする、不可知論にある。つまり、宇宙や自然は、神そのものではない。あくまで、神の属性を表しているのにすぎないのである。同様に、神の預言者と呼ばれる聖なる人物たちでさえも、神そのものではない。彼らは、人間的な性質に「聖霊」としての性質を備え持つ、特殊な存在であるが、究極的には、神の本質そのものとは異なる。言い換えると、日本の思想には、最高にして唯一神なる創造主という概念がない。

もうひとつの決定的な違いは、バハイでは、その不可知なる神の意志を伝えるために、神の顕示者と呼ばれる神と人間の仲介者が、1,000年前後の周期で遣わされ、「宗教」という形で、その意志を説くという概念がある。さらに、バハイでは、この宗教が、人類の発達段階に応じて徐々に啓示されてきたという「累進的啓示」の概念がある。日本の思想には、このような概念がない。日本人の「精神論」も、宗教的な色合いが薄く、むしろ、汎神論的・儒教的・道教的な宇宙観に基づいていると言えよう[35]。

現在、宗教ブームにあるとは言え、宗教に対するイメージは社会全体としては否定的であり、歓迎的ではない。しかし、同時に、宗教間の違いに対しては比較的寛容的で、歴史的にも宗教的迫害は比較的少ない。そのような風潮にある日本は、先の大戦で被爆され、平和を優先する国となったことも合わせると、世界の宗教的闘争や過激的な事件の絶えない今日、仲介役を果たせる貴重な存在である。ただし、世界の宗教に対する知識と理解を深めなければ、その役は十分には果たせないと思われる。その点でも、バハイ信教の役割は強調してもしきれない。

---

31 アブドル・バハ、「質疑応答集」、55章
32 同上、56章
33 バハオラ、「落穂集:その1」、pp.48-50.
34 同上、pp.51-52。
35 日本人の心理を格言を通して説明した名著に、南博の「日本人の心理」(1964)がある。主な格言に次のようなものが上げられる。自我:長いものには巻かれよ、滅私奉公、触らぬ神に祟りなし、好いたことして暮らす、一寸の虫にも五分の魂、人のものは我がもの。幸福感・不幸福感:九分は足らず十分はこぼれる、死んで身につくものはなし、ならぬ堪忍するが堪忍、苦労は人につきもの、身のほどを知れ、月にむら雲・花に風、浮世の旅、月雪花の楽しみ、上を見るな・下を見よ、馬鹿を承知のやくざで、苦おのずから楽となる、足るを知って分に安ずる、茶人の物好き、金銀ほしからぬ顔をすること。合理性・非合理性:運は天にあり、窮すれば通ず、つらい定め、何の因果か因縁か、人事を尽くして天命を待つ、理屈で行かぬ世の中、道理が勝つ、割り切れる人生。精神性・物質性:思う一念岩をも通す、物事は気の持ちよう、本を踏むと罰があたる、忠孝はからだの養生、からだがもとで、色を思うも本は欲。人間関係:義理の世の中、義理ばるよりも頬張れ、義理と人情の板ばさみ、義理人情を割り切れ、公私の区別、責任のがれ。筆者はこれに、死生観として、「今度生まれ変わったら」を追加したい。

結　論

英語の spirit、spirituality という単語には、多数の意味があるが、緒言で述べた意味に相当する日本語としては、「精神」、「霊」、「魂」、「心」、「精神性」、「霊性」などがあげられる。これらの漢字の語源を調べてみると、現在我々が日常で使っている意味とは必ずしも同じ概念に由来しているわけではない。また、哲学的・宗教的に調べてみても、様々な意味がある。日本人の「精神性」は、アニミズム、神道、仏教、儒教などの影響を受けながら形成されており、したがって、人格を持った唯一神が人間に意思を伝えていくという宗教観が非常に薄く、日本人の「精神論」も、宗教的な色合いが薄く、汎神論的・儒教的・道教的な宇宙観に基づいている。また、現代は科学的な進歩が目覚しく、科学的な精神論が展開されている。それで、伝統的な精神論が必ずしも通用しなくなってきているほどである。

そのような中で、バハイの精神論は、伝統的な日本の精神性との一致点もあると同時に、最新の科学的精神論とも共通点が多い。ただし、日本人には、唯一神そして累進的啓示というバハイが説く概念がない。日本がバハイ教から学びうる要素としては、神が存在し、その意志が顕示者を通して伝えられているという概念である。そこには、個人として、社会として、そして国として生きるための明確な指針が表されているからである。

英語の spirituality の日本語訳として適切なものをひとつ選ぶことはできないが、「精神性」または「霊性」あたりでさしつかえないと思われる。むしろ、その概念を適切に理解しておくことが重要であり、それさえあれば、どの用語を採用したとしても、自然に受け入れられると思われる。あるいは、何度か試行錯誤を繰り返して、そのうち最も適切な用語が確立されるであろう。

最後に、今後の研究テーマとして、日本人の神観念、日本人の死生観、さらにニューサイエンスによる精神論とバハイのそれの比較など、本研究で取り上げた各セクションのトピックをさらに彫り上げてみることを提案したい。

引用文献

アブドル・バハ（Abdu'l-Baha）, *Abdu'l-Baha in London*, London: Baha'i Publishing Trust, 1982.

———、「パリ講和集」、バハイ出版局、1976

———、「質疑応答集」、バハイ出版局、1990

バハオラ（Baha'u'llah）、「バハイ祈りの書」に抜粋、バハイ出版局、1992

———、「落穂集、その1」、バハイ出版局、1982

———、"*Suriy-i-Vafa*," *Tablets of Baha'u'llah*, Baha'i World Centre, 1978.

———、"*Tablet of Kullu't-'ta'am*," in Adib Taherzadeh, *The Revelation of Baha'u'llah*, Vol. 1. Oxford: George Ronald, 1980.

Chicago Tribune (IL), May 11, 1997

Denver Post, The (CO), September 14, 1993

鎌田正、米山寅太郎、「漢語林」、大修館、1990

「広辞苑」、新村出編、岩波書店、1991

南博、「日本人の心理」、岩波書店、1964

「ランダムハウス英和大辞典」、小学館、1987

San Francisco Chronicle (CA), June 22, 1998

「小学館ランダムハウス和英辞典」、小学館、1987

尊田望、「21 世紀へ向けて」、ワンワールド・インタナショナル、1999

「哲学事典」、平凡社、1989

天外伺朗、「ここまで来たあの世の科学」、祥伝社、1994

Washington Post, The (DC), June 17, 2001

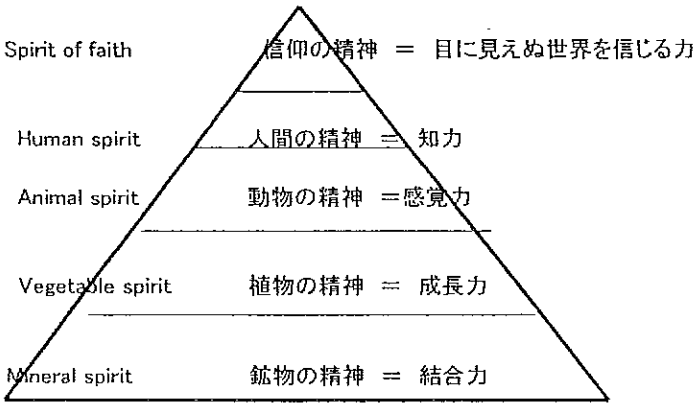

図 4.　精神の 5 局面

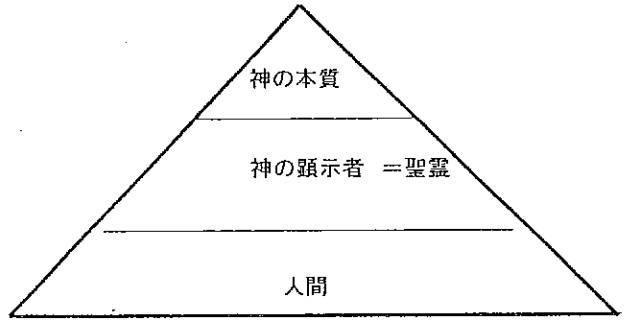

図 5.　神・顕示者・人間の世界

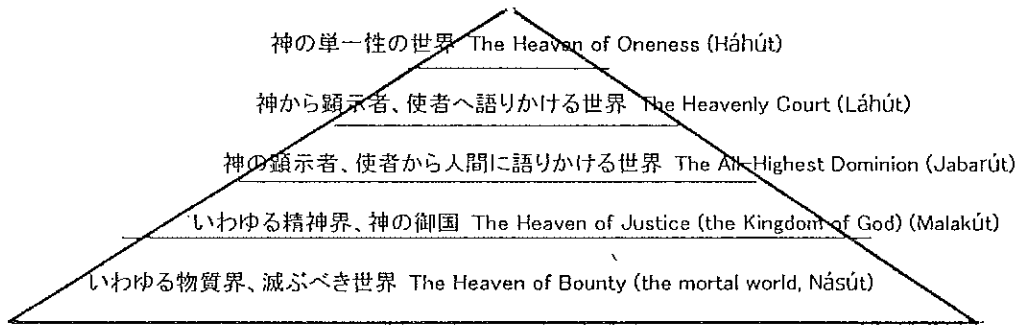

図 6.　神の世界の区分

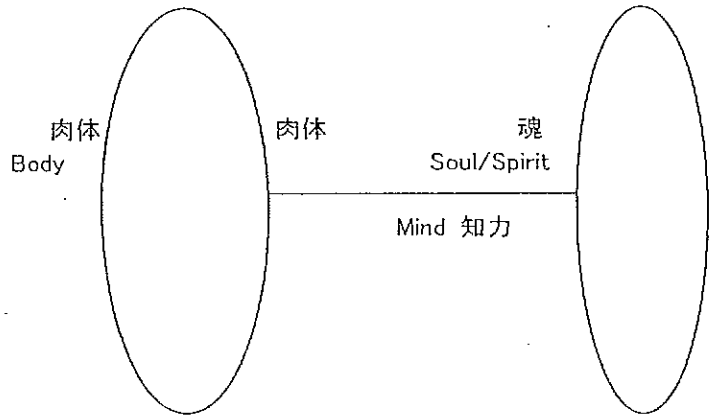

図 7. 肉体・知性・精神の関係

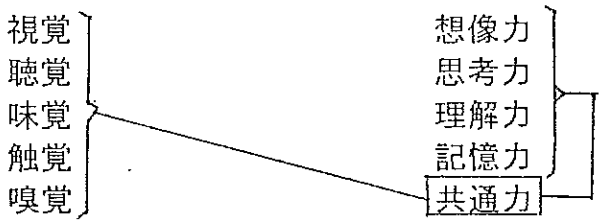

図 8. 肉体の 5 つの力と魂の 5 つの力

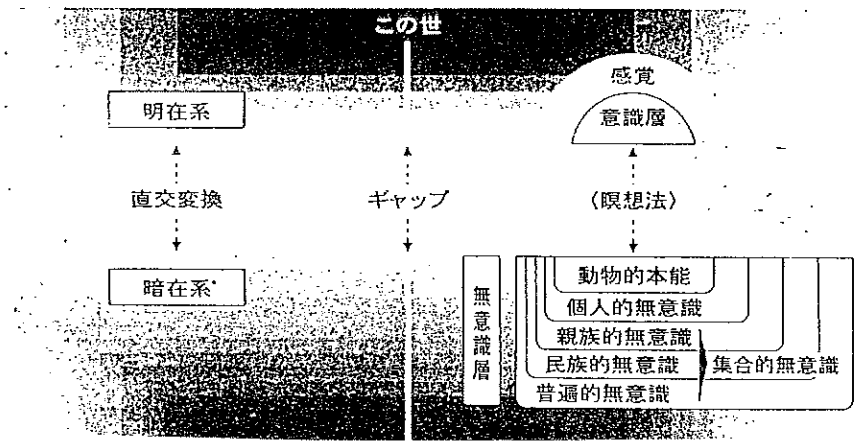

図 9. デイビッド・ボームの「宇宙モデル」とカール・ユングの「無意識層」の概念
(天下、1996、p.241 より引用)

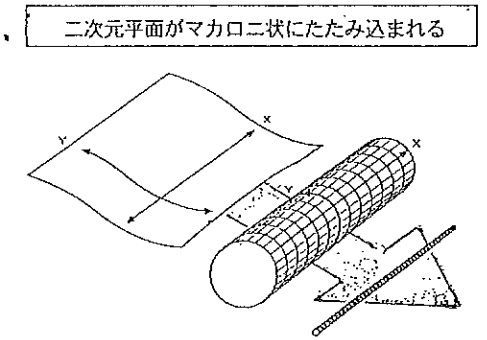

図 10. 「超ひも論」
(天下、1996、p.125 より引用)

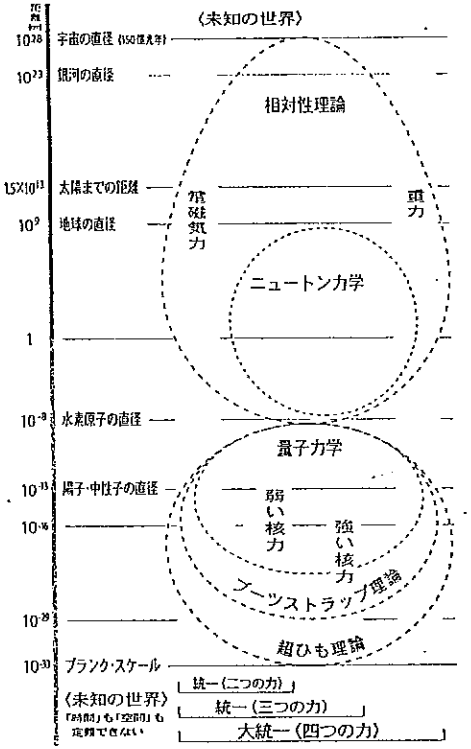

図 11. ミクロの世界とマクロの世界の理論の統一
(天下、1996、p.137 より引用)

The Japanese Concept of Spirituality

Nozomu Sonda

The word "spirituality" is relatively spontaneously and freely used in English conversation and writing. Its Japanese counterpart *seishinsei (精神性)* or *reisei (霊性)*, on the other hand, is not as much used; if used at all, it is not well understood or accepted by its audience. Thus, the author decided to investigate the origin of the Japanese concept of spirituality. There are a number of meanings for the English words "spirit" (and "spirituality"). The Japanese equivalent are *seishin (精神), tamashii (魂), rei (霊), kokoro (心), seishinsei (精神性), and reisei (霊性)*. When the original meaning of these Chinese characters were examined, we found that they are not necessarily the same as the concepts we use today but were rather more broadly defined. Further meanings and definitions given by religious and philosophical thoughts were examined, and concepts of spirit based on the newest scientific theories were discussed. While there are many common aspects between the Japanese concept of spirit and that of the Baha'i teachings, the conclusive differences are that (1) the monotheistic and agnostic concepts of God and (2) the concept of progressive revelation though the Manifestations of God are lacking in the Japanese thought. In terms of the "best" Japanese term for "spirituality," we suggest that *seishinsei* or *reisei* is adequate for the time being. The most important thing is that users have proper understanding of the concept; then, the appropriate term will follow naturally.